

「沖縄の思い」を広く伝えたい

沖縄県民集会に参加して—8月10日、11日

8月8日仕事から帰宅し、ニュースの速報に愕然としました。この間、沖縄の基地問題に全力で闘っていた翁長知事死去の速報でした。11日に開催される県民集会を前に、さぞ悔しい気持ちだったと思います。県民集会では、翁長知事の次男の雄治さんから、亡くなられる日までベットのうえで、病魔と闘いながら資料を整理されていたと聞いていたので、命をかけて沖縄を守ってこられたその生き様に尊敬の念を抱きました。

10日、沖縄到着後、すぐに辺野古に向い基地建設の進捗を視察し、テント村で講話を聞きまし

た。お話をしたのは、東京から名護に転居し、辺野古基地反対運動に取り込まれている、少しやせ形で全身日焼けで真っ黒の男性の方でした。

この間の運動の取り組み、日本政府が真実を捻じ曲げ、強行に基地建設を押し進めていることが、言葉の重みから十分に伝わりました。(安全性を確保するための高さ制限の違反、埋め立て予定地のマヨネーズ状の軟弱地盤、サンゴ移植の虚偽など)

日本政府は1996年から普大間移設計画を日本の税金ですすめ、移設承認を知事が取り消し、

埋め立て根拠がなくなつてからも、法令・県民の主張を無視して、ゲート前の座り込み運動をしている住民を日本の警察が排除している。講話を聞くほどに矛盾を感じました。

滞在中に、沖縄返還に尽力された瀬長亀次郎さんの活動を学びました。基地移設問題の根底には、1972年沖縄返還の経過ですでに計画され、日本が移設建設を行わなければならないシールが敷かれていた歴史があります。返還後もたたかいは続いていることを実感しました。

11日当日の県民集会には、3万人の予想を大きく上回る、7万人の老若男女が参加しました。

若い世代の参加が多かったことも驚きで、沖縄を守ろうとする



医療介護まちづくりの会から参加のみなさん

県民の意志が継承されていることを実感しました。

米軍基地がほぼ沖縄に集中している状況で、1995年の米兵による少女乱暴事件のような事件はなくなりません。もし私が住んでいる町がそつだったなら、私も沖縄の方と同じくたたかいたいに参加します。

(介護事業部部長 牧 友英)



高校生1日看護師体験

たいへんな仕事だけど やっぱりなりたい!



血圧測定体験

毎年、春・夏に高校生を対象とした、1日看護師体験を行っています。進路として看護職をめざしている・迷っている学生に、看護についてより理解を深めてもらう目的です。この夏も7日間行い、参加人数189人でした。

9時から白衣に着替え、グループに分かれて自己紹介をして始め



ります。そのあと、耳原総合病院院内を見学しました。見学後は、またグループに分かれて、検温の体験をし

ます。看護学生に教えてもらいながら、聴診器を使った血圧測定や脈拍測定を行いました。血圧測定は「むずかしい」とあちこちで声があがり、聴診器で初めて聞いた心音にびっくりしたり、と楽しく学びました。

病棟の体験もしました。今回は手術室の協力もあり、手洗い・ガウン・マスク・帽子の装着をして部屋に入りました。また、他の病

棟では、とろみ茶(飲み込みやすくなるために粘度をつけたお茶)の試飲、注射器を触ったり、車イスに乗ったり、実際に患者さんのシヤンプーを手伝ったりしました。

病棟体験後は看護師から、仕事のやりがいや苦勞した話などを聞き、イメージを膨らませました。

今回の経験を通して感じたことやこれまで気になっていたことなどの質問タイムのあと、記念撮影を行い終了しました。

去る7月21日に西日本豪雨被災地の一つ、広島県坂町小屋浦地区の災害支援活動に参加しました。被災後2週間たっていました。小屋浦地区は道も細く重機が入れないため、川や道はもちろん、家も車も土砂に埋まったままの状態が多く残っていました。豪雨の後は猛暑日が続く、水は干上がり土砂が濁りコンクリートのようになりかけていました。

それを住人の方々は手作業で取り除いていました。

私が参加した班の住人の方の希望は、「玄関付近を綺麗にして欲しい」というものでした。現場を見せてもらうと、玄関のドアの3分の1ほどが土砂で埋まっており開閉ができない状態でした。硬くなった土砂をまずは細かく割り、それをショベルで掻き出し一輪車で運び出す。この単純作業を何度も繰り返すのですが、玄関の敷石

シリーズ
現場からの
視点

その40

人が足りない! みなさんもぜひ支援活動に参加を!

西日本豪雨被災地支援に参加して

はなかなか見えません。暑さが体力を奪い、5回鉄を振れば心臓の動悸が止まらなくなり、休まずにはいられません。なんとか作業時間の中で玄関の敷石が見えるところまではできましたが、部分的に土砂をどけただけで、裏庭にはこれ以上の土砂が溜まっているのが見えました。

まだまだ人手が足りません。迅速でかつ長期的な支援が必要だと、現場に入つて強く感じています。女性でもできることは、たくさんあります。人がたくさんいると、もっとできることは増えると思います。ぜひみなさん支援活動に参加してみてください。

(社会医療法人同仁会 耳原総合病院 リハビリ科 檀浦 慶子)

